

看護職部門

入選

父ちゃん、ありがとう

【埼玉県】立原 洋子 たてはら ようこ
39歳

「ああ気持ちいい」。これが父の最期の言葉だった。父は抗がん剤治療を受けながらも元気に過ごしていた。5年目となった年に薬が効かなくなり、緩和ケア・訪問看護を受けることになった。初診の問診で「最期をどこで迎えたいですか」の問いに、父は、「家がいいな」と即答。大工だった父は自分で建てた自宅を希望した。それは、私の希望でもあった。

治療を止めたとたん、日に日に父は弱っていった。家族や親族は看護師である私に期待しているのがよく分かる。看護師の立場と娘の立場。この先どうなっていくかも分かっているが、何とかしてあげたいという気持ちと葛藤していた。そんな中、私は父の傍らにいなながらも逃げ出したくなった。父から「俺はもうダメなのか？」と聞かれることを恐れていたからだ。常に何て答えようか悩んでいた。けれど、その質問はされないまま、ある夜、母と2人で父の体を清拭した時、「ああ気持ちいい」と言葉を遣^やして旅立ち^つてしまった。

覚悟はしていたが、その瞬間、私は看護師ではなく父の娘としての冷静さを失っていた。もつと何かできたのではないか、娘は看護師だと誇りに思っていてくれた父。私はそれに応えることはできたのだろうか。あの質問をされたらどうしようかと考えるあまり、ちゃんと向き合っていないかったのではないだろうか。

6年たった今でも自分に問いかけている。
唯一、救いなのは父の希望通り、自宅で看取ることができたことである。

後日、緩和ケア認定看護師に聞いてみた。患者から弱気な言動が聞かれた時どう答えるのか。答えは「なぜ、そう思うのかを聞く。痛みや苦しみがあるのならそのケアをを行う」と教えてくれた。

「傾聴」。看護の基本だということに気付かされた。忘れてはいけない、患者の声を聞くこと。逃げずに向き合うこと。父から学ばせてもらったことを胸に、日々の看護を頑張ろうと思う。